

(トップページ:<http://members3.jcom.home.ne.jp/3632asdm/>)

(サウジアラビア:<http://members3.jcom.home.ne.jp/3632asdm/SaudiArabia.html>)

マイライブラリー : 0 1 5 4

(注)本稿は 2007.4.1~4.13、ブログ「アラビア半島定点観測」に 3 回にわたって掲載されたものです。

前田 高行

辞めさせてもらえないサウジアラビアのサウド外相とナイミ石油相

目次	頁
1. 任期満了の閣僚全員が留任	1
2. ファハド前国王時代にも辞任を考えたサウド外相	2
3. 「石油のグリーンSPAN」と呼ばれるナイミ石油相	3

1. 任期満了の閣僚全員が留任

3月22日、サウジアラビアのアブダッラー国王は4年の任期に達した閣僚全員を更に4年間留任させる勅令を発した。同国は国王が首相を兼ね、その他の閣僚は国王が任命する仕組みである。前回の2003年4月には小幅ながらも入れ替えを行ったが、今回は閣僚の担当替えもなく、そのまま再任された。(注、イスラム暦のため任期4年でも通常の西暦より約1ヶ月短くなる。)

サウジアラビアでは首相以外の国防相、内相、外相など主要なポストはサウド家の王族が独占しており、スルタン皇太子が1962年以来45年間も国防相のポストにあるのを始め、ナイフ内相(スルタン実弟)及びサウド外相(ファイサル第3代国王子息)も1975年から30年以上同じ大臣職を務めている。1990年代後半、病弱のファハド前国王にかわり国政の実権を掌握したアブダッラー皇太子(現国王)は、1995年に大幅な内閣改造を行い、石油相に当時サウジアラムコ社長であったナイミを起用した。その後、1999年及び2003年の任期満了のとき、彼は閣僚人事に大きな手は加えなかったため、大半の閣僚は12年以上にわたり大臣職を続けている。

このため海外のメディアは、今回は一部閣僚が交代するのではないかと、との観測記事を流した。そしてその焦点となったのがサウド外相とナイミ石油相の二人だったのである。サウド外相については長期にわたる激務のため自ら退任を申し出た、との憶測が流れた。またテクノクラートであるナイミは、非王族としては財務相と並ぶ重要閣僚である石油相のポストを10年以上続け、既に72歳の高齢でもあるため、欧米メディアは交替の時期と踏んだようである。

しかし両名とも再任され、更に今後4年間、外相或いは石油相として激務を担当することとなった。アブダッラー国王はサウド外相、ナイミ石油相とも「余人を持って代えがたい」と考えて留任させたことは間違いない。サウジアラビア内閣は首相のアブダッラー国王が83歳、副首相のスルタン皇太子が79歳、ナイフ内相が74歳など(但し各人の年齢には諸説がある)、極めて高齢者が多いのが特徴である。その意味では67歳のサウド外相や72歳のナイミ石油相は未だ若いということであ

ろうか。

2. ファハド前国王時代にも辞任を考えたサウド外相

実はサウド外相はファハド前国王が健在であった頃、一度真剣に辞任を考えたことがあると言われる。当時サウジアラビアは現在以上に親米色が強く、サウジ外交の主軸は対米関係であった。サウドは既に外相であったが、駐米サウジアラビア大使は国王、皇太子に次ぐ実力者スルタン副首相兼国防相の息子バンドル王子であった。1983年に33歳の若さで駐米大使となったバンドル王子は、本国からの潤沢な資金を武器にワシントンの中枢に食い込み、ブッシュ大統領(現大統領の父親)など歴代政権と特別な関係を築き上げた。

そしてバンドル駐米大使は米国中樞部から得た情報を、直属の上司であるサウド外相ではなく、父親であるスルタン国防相に直接報告し、さらにスルタンはそれを実兄で最大の親米派のファハド国王に伝えることがしばしばだったようである。つまり米国の重要な情報はスルタン・バンドル親子のホットラインに流れ、サウド外相はつنبば棧敷に置かれたのである。サウド外相はこのことですっかり嫌気がさし、アブダッラー皇太子(当時)に外相辞任を申し出た、と言われる。実はアブダッラー自身も同国 NO.2 の皇太子でありながら、ファハド、スルタン及びナイフ内相のいわゆるステイリ・セブンに国政を牛耳られ、国家警備隊と有力部族の支持だけを頼りに臥薪嘗胆の境遇にあったのである。

バンドル駐米大使(スルタン国防省の子息)の勝手な行動に嫌気が差して辞任を申し出たサウド外相に対し、アブダッラー皇太子(当時)は時期が来るまで辛抱するよう説得した。ほどなくファハド国王が重い病に倒れたためアブダッラー皇太子が実権を握り、サウド外相の忍耐が報われる時が来た。アブダッラーは外交を全面的にサウド外相にまかせ、サウドもこれに応じて世界を飛び回り、サウジアラビアの外交的地位の向上に尽くした。

2005年、ファハド国王が亡くなりアブダッラーが第六代国王に即位した。その年、駐米大使はバンドル王子からトルキ王子に交代した。トルキ王子はサウド外相の実弟であり、駐英大使からの横滑りであった。サウド外相としては外交上の最大の盟友である米国との関係を実弟のトルキに委ねることで安堵したに違いない。しかしトルキはわずか任 1 年数ヶ月で大使を辞任した。唐突な辞任は世間を驚かせたが、本人自らの申し出、とのみ伝えられ、真相は闇の中である。後任の大使にはアブダッラー国王の外交顧問アデル・ジュベアが任命されたが¹、この人事はむしろサウド外相の存在感を高める結果となった。アブダッラー国王は信頼するサウド外相に対米外交の全権を委ねたと考えられる。

さらに先月リヤドで開かれたアラブ・サミットにおいて、2002年のベイルート・サミットで採択された和平提案が5年ぶりに日の目を見たことにより、サウド外相に中東和平の仲介役としての役割が新たに加わった。2002年の和平提案はアブダッラー国王(当時皇太子)が提唱したものであり、Saudi Initiative と称されている。Saudi Initiative はアブダッラー国王の外交上の悲願だったのである。当時、イスラエルのシャロン首相は分離壁の建設を始めるなどパレスチナに対し強政策を取っており、イスラエル、米国双方は Saudi Initiative を歯牙にもかけなかったが、今や情勢は180度転

換し、イスラエルのオルメルト首相はアラブ・サミットの和平提案に自国の存亡を賭ける姿勢すら示し始めた。

リヤド・サミットの和平提案によりサウジアラビアは世界注視の的となった。舞台で言えばサウジ外交は最大の見せ場に入ったのである。この舞台で主役を演じられるのはサウド外相をおいて他にないことは明白である。アブダラー国王は自分の長年の夢を彼に託した。こうしてサウド外相は辞めたくとも辞められない状況となったのである。優秀な外交官であり、有力な王族の一人でもある彼にとって、サウジアラビアの国王であり、またサウド家のトップでもあるアブダラーの願いをむげにできるはずはない。サウド外相は尊敬し信頼するアブダラー国王を支えるために、外相として最後の勤めを果たそうとしているようである。もしサウジアラビアのリーダーシップで中東に平和が訪れれば、サウド外相はサウジアラビア次期国王の呼び声がかかるかもしれない。但し、彼がそのような野心を抱いて職務を遂行しているとは思えない。仮に彼が国王になれたとしても、それはあくまでも結果論にすぎないであろう。

3. 「石油のグリーンスパン」と呼ばれるナイミ石油相

今回の閣僚人事でサウド外相と同様、辞任が噂されながら留任したのがナイミ石油相である。但し彼本人は辞めたいとも辞めたくないとも言っていない。ナイミ辞任説をはやすメディアの執拗な質問に対して彼は、「閣僚の任免権はすべて国王にある。本人に深刻な健康不安がない限り、閣僚は国王によって任命或いは罷免される。私はご覧のとおり健康である」と、記者達を煙に巻いた²。

しかし彼も 1995 年にサウジ・アラムコ社の社長から石油相に任命されて以来、任期は 3 期 12 年に達し、年齢も既に 72 歳の高齢である。いつ交替してもおかしくないが、アブダラー国王は彼を更に今後 4 年間石油相のポストに留めることとした。ナイミは今や単なるサウジアラビアの石油相ではなく、産油国全体のリーダーであり、OPEC の顔として押しも押されもせぬ第一人者である。と同時に OPEC 穏健派の代表として消費国側の政府や国際石油会社の彼に対する信望は厚い。

石油価格が上下動するたびに、世界最大の生産量と埋蔵量を誇るサウジアラビアの石油政策がどのようになるのか、或いは OPEC の生産枠が変更されるか否かについて、世界はナイミ石油相の一言一句に固唾を飲む。そしてナイミ石油相は、OPEC 総会で急進派を説得し、常に消費国の期待を裏切らない結論を導き出す。メディアはそのような彼を「石油のグリーンスパン」と呼んでいる。グリーンスパンとは言うまでも無く前 FRB 議長のことである。グリーンスパンは FRB 議長を 18 年間つとめ、その間、通貨の番人として絶妙の舵取りを行い、米国の好景気を維持すると共に、G8 先進国財務相会議でも強いイニシアティブを発揮した。彼は通貨の面から米国及び世界経済を安定させたカリスマ的な人物である。ナイミはエネルギー面で世界経済を安定させることができるカリスマ的な人物であり、それ故に「石油のグリーンスパン」と呼ばれるのである。

ナイミ石油相は在任期間が 13 年目に入った。先々代の石油相で OPEC 勃興期に活躍したヤマニは 24 年間も石油相を務めており、それに比べれば決して長いとは言えない。しかしヤマニは若干 32

歳で石油相になり、退任した時もまだ 56 歳の若さであった。それに比べればナイミは 60 歳で石油相に就任し、今や 72 歳である。早くから英才教育を受け、国王に重用されたヤマニと、アラムコに入った後、嘗々辛苦して 60 歳でトップに登り詰め、それから石油相になったナイミ。二人の経歴は好対照である。

ナイミの出世物語は伝説的である。1935 年にサウジアラビア東部の貧しい家に生まれた彼は、わずか 13 歳でアラムコ(現サウジアラムコ)に入社した。仕事は事務所のお茶汲みと書類運搬の雑用係であった。しかし聡明で勤勉な彼は欧米人社員から可愛がられ 10 代後半には、社内の奨学金制度によりバイルートのアメリカン大学、ついで米国本土の大学で地質学部を卒業、1963 年には遂にスタンフォード大学で地質学修士号を取得したのである。

石油の開発・生産の専門家として社内で順調に昇進、1975 年に生産・水圧入担当の副社長となり、1984 年には遂に社長に就任した。そして病弱のファハド国王にかわりアブダッラー皇太子(現国王)が実権を掌握して、1995 年に内閣改造を行った時、ナイミは石油相に抜擢されたのである。その後の石油相としての彼の活躍は説明するまでも無いほどであり、「石油のグリーンスパン」と呼ばれている事実が全てを物語っている。

彼は無名の家柄の出身であり、勿論王族とも縁戚関係は全く無い。王族が幅を利かせる閣議での序列も多分低いのであろう。閣議の様子を伝える地元メディアにも彼の名前は登場しない。そのかわり彼の名前は世界のメディアで大々的に取り上げられている。ナイミ石油相は国内よりも海外での知名度が抜群である。

ナイミが 12 年以上も石油相の地位にとどまっているのは、アブダッラー国王の信任が厚く、また彼も国王の信頼に応えているからである。また産油国、消費国を問わず外国のエネルギー関係者も彼に強く期待している。従って彼は今後も余程のことが無い限り石油相であり続けるであろう。もし変化があるとすれば、それはナイミ自身の健康に問題が生じた時か、或いは彼を支えているアブダッラー国王の身に何か異変が生じた時であろう。優秀で忠実な幕臣がボスと命運を共にするのは洋の東西を問わない歴史である。

(完)

本稿に関するコメント、ご意見をお聞かせください。

前田 高行 〒183-0027 東京都府中市本町 2-31-13-601
Tel/Fax; 042-360-1284, 携帯; 090-9157-3642
E-mail; maedat@r6.dion.ne.jp

¹ 'Jubair is new envoy to US', Arab News on 2007/1/30

² 'OPEC may steer away from more oil output cuts at next meeting', Gulf Times on 2007/2/14